

音韻変化における正書法の役割

— フランス語の [ŋ] と重子音について —

藤 村 逸 子

1. 序 論

フランス語で、チャップリンを [ʃaplɛ̃], ロビンソン・クルーソーを [ʁɔbɛ̃sɔ̃ kʁyzɔe] と発音するのは、英語の綴り字をフランス語読みすることによる。このような綴り字読みの現象は、外来の固有名詞についてのみ起こるのではなく、普通の外来語はもちろん、本来のフランス語の単語にさえも起こっており、これまで様々の記述がなされて来た。そもそも、正書法と発音の間の関係が問題になるのは、言語の書記体系と音韻体系の間に不一致がある場合である。外来語音の場合、共通の文字体系を使っている諸言語間においては、既知の文字と未知の音という関係のために、綴り字の方にひかれる、という現象が起こる。さらに、フランス語のように、自身の音韻体系と、正書法の体系の間に不一致がある場合には、聞き慣れているはずの音さえも、綴り字の影響を被り得るのである。綴り字読みがすでに定着した、あるいは定着しようとしている例をいくつか、以下に挙げる。

<gageure>⁽¹⁾ : [gazy:r] > [gazœ:r] / <heure> : [œ:r]
 <cheptel> : [ʃetɛl] > [ʃeptɛl] / <adopter> : [adopte]
 <legs> : [lɛ] > [lɛg] / <drags> : [drag]
 <poignet> : [pɔɲɛ̃] > [pwajɛ̃] / <poing> : [pwɑ̃]⁽²⁾

これらはそれぞれ、斜線の右側に示した語を代表とする、正書法と発音の連合

から影響を受けた例である。つまり、この連合が強く、数の上で大多数を占めているために、少数の例外であったものが、同化された結果である。この現象を、意味による類推に対し、書記法による類推と呼ぶことができよう。しかし、このように、結果的に語形を変えるに至る、書記法による類推は、形態論のレベルで取り扱われ、音韻論において直接取り扱われることは稀である。なぜなら、上記の例を見ても、変化の前後のいずれもが、フランス語の音素体系からも、音素配列からも逸脱しているわけではないからである。類推によって、ある音素、音素結合が消滅する可能性はないわけではないが、新しい音素、音素結合が生まれることは、決してない。しかし、外来語音の場合は、事情が異なる。先に挙げた、チャップリンの場合でも、英語の [tʃ] をフランス語に同化させて [ʃ] に変え、フランス語に異質な音が導入されるのを拒む役割を果たしたのが、正書法の働きであることは明らかである。

現代フランス語の音声の問題を考える時、変化に関しては、安定期にあると言われている。現代の文明語の場合、教育の普及や、正書法の安定のために、かつて中世以前に起こったような、ダイナミックな変化は見られないのが普通である。新しい音素、あるいは音素結合が、現代の文明語に成立するには、外来語音が大きな役割を果たすと考えられ、衆知のように、日本語にも、[ti] や [Øa] がこのようにして生まれた。しかし、フランス語は、外来語音を綴り字というフィルターに一度通してから受け入れるため、非常に巧みに自らの音韻体系に同化させてしまうのは、上記で見た通りである。このため、あれほどやかましく言われている、anglicisme についても、少なくとも音韻面では、さほど大きな影響を被っているわけではない。ただ一つ、Martinet らが、すでに音素として認めている [ŋ] は例外である。この音は、*camping, smoking, shopping* 等、英語の <ing> で終わる語の借用によっているのであるが、なぜ、この音だけは、綴り字のフィルターを通り抜け得たのであろうか。

また、フランス語にとって、もう一つの強力な外国語はラテン語である。普通、ラテン語からの借用語は、*mot étranger* でなく、*mot savant* と呼ばれるもの

の、基本的な性格は、他の外来語と変わるところがない。ただ、ラテン語からのフランス語への借用は、大変長い伝統を持ち、その間に、借用語をフランス語化する方法が確立してしまったために、音声の面でも、大きな混乱はみられないのが普通である。ところが、ラテン語からの借用音の中で、16世紀から現在に至るまで、不安定な価値しか持たない音が存在する。それが重子音である。重子音を耳にすることは、大変頻繁であるにも関わらず、この音は音韻的価値を持たないと言われている。この外国語音は、なぜフランス語に組み込まれることもなく、と言って消滅することもなく、現在に至っているのだろうか。この現象に関して、正書法はいかなる影響を及ぼしているのであろうか。

そこで本論では、外国語音である [ŋ] と重子音について、正書法との関連から考察を試みる。外国語音は、音韻変化の外的原因の重大な要素であり、フランス語に対して大きな影響力を持つ外国語は、英語とラテン語であることから、[ŋ] と重子音を比較しつつ、検討を加えるのは、フランス語の外国語音に対する対応を明らかにし得よう。

資料として、種々の発音に関する手引き書や辞書を用いたが、特に現在の状況を語彙的に明らかにするため、A. Martinet, H. Walter の *Dictionnaire de la prononciation française dans son usage réel* (1973) を使った。(以後、DMW と略記する。) 資料としての留意点は、第一に、これが17人のパリ在住の知的レベルの高い人々によるアンケートの結果にすぎない点である。したがって、フランス語を必ずしも代表するわけではないが、本論では語彙的なレベルでの比較を行うので、少々のはずれは無視してさしつかえないと考える。第二に、アンケートが、書かれたテキストを読ませ、それを音声表記に直すというやり方で行なわれた点である。このため、本論で問題とする綴り字読みが、普通より多くなる可能性があるが、これについても、相対的に取り扱う限り、極端な誤りを冒すことはない⁹⁾と考える。

2. 重子音について

ラテン語に豊富にあった重子音は、フランス語では、[rr] (17世紀まで存続)を除いて、遅くとも11世紀までに消失してしまい、古フランス語期には、語の接触によるもの以外は全く見られなくなった。しかし、16世紀になって、ラテン語の借用という形で、重子音は新たに導入されることになった。そして《génie de la langue française》にふさわしくないとの批判を受け、不安定ではありながら、以来、綿々と存続している。

まず最初に、現代フランス語にみられる重子音の分類をする。

2.1 重子音の分類

重子音は、二種類に大きく分けることができる⁴⁾。

1. 偶然による重子音

- a) *courait / courrait*
- b) *éclaira / éclairera, la dent / là-dedans*
- c) *elle eut / elle lut*

2. 本来の重子音

- a) *syllabe, grammair, sonnet*
- b) *irréel, illisible, inné, immotivé*

1は、形態素、あるいは語の接触により偶然生じた重子音で、上記のように音韻的対立を示すものである。これに対し、2は、序論で述べたラテン語の借用に起源を持つ重子音で、音韻的対立を示すことは、今のところ、langue としてのフランス語ではないと言われている。2のbは、一見すると接頭辞と語幹の偶然の接触であるかのようにあるが、実は接頭辞 *ir-*, *il-*, *im-*, *in-* は、後に続く音素 [r], [l], [m], [n] による同化の結果で、偶然と呼ぶことはできない。

本論では、2の本来の重子音を取り扱い、以後重子音と呼ぶ時は、これを指す

ことにする。

2.2 重子音の音韻論的考察

では、重子音が音韻的価値を持つとは、どういうことであろうか。例えば、イタリア語では、重子音は音韻的対立を示す。/pala/《シャベル》と /palla/《球》、/buka/《穴》と /bukka/《口》がその例である。また、日本語にも、重子音による対立がある（/kata/《肩》と /katta/《勝った》）。そして、Troubetzkoy (1970) は、重音化の対立を、*corrélacion de mode de franchissement du troisieme degré* として認め、重子音を単一音素とみなすことができると言っている。ただし、その表現は、非常に曖昧で、「音素結合と単一音素の一種の中間的位置を占める」(p. 184) と言い、その理由は、重子音は常に2音節にまたがり、一般の子音結合と同じ性質を多く持つためである、としている。

一方、ロシア語や英語では、我々の定義した重子音は存在せず、むしろ重子音は境界信号の役割を果たしている。これを Troubetzkoy は、明らかに子音結合であるとしている。

現代フランス語ではどうであろうか。Carton (1974) は *la Syrie* と *l'Assyrie* を [s] / [ss] の対立による *paire minimale* の例として挙げている。もしも、これが確かに対立しているならば、重子音は音韻的価値を持つ。また、*Galate* と *gallate*、もし [e] と [ɛ] は語中で対立しないという立場を採るなら、*Hélène* と *hellène*、*célite* と *cellite* の組み合わせも、*paire minimale* になる可能性があることになる。これらを対立と考えてよいかどうかについては後で述べるが、例え、対立しているとしても、この対立が音素結合によるのか、単一音素によるのかという問題は依然として残り、簡単に結論を出すことはできない。しかし、この議論は、本章の目的のために必ずしも必要ではないため、これ以上触れないことにする。

2.3 重子音の不安定性

2.3.1 音素別生起

現代フランス語の重音化の対立の有無を調べるため、DMW を用いる。まず最初に、音素別によるその生起を調べたのが表 I である。調査は、DMW の a と c で始まる語の重子音を 17人のインフォーマントの内、何人が発音しているかを調べることによってなされた。DMW から、重子音の生起ゼロを全て調べることは、困難であるため、比較の材料として、*French Word Book* 6136語の a, c で始まる語のうち、同じ子音字が母音間で表記されている語の数を付記した⁵⁾。

表 I

	[d]	[f]	[k]	[l]	[m]	[n]	[p]	[r]	[s]	[t]	[b]	[g]	計
<i>French Word Book</i> より	2	18	17	28	29	11	12	36	65	25	2	1	246
1人以上	6	19	3	109	22	24	7	24	107	12			333
3人以上	1	5		90	19	11	1	7	54	4			192
5人以上		1		71	11	2	1	4	16				106
9人以上				36	3			1	4				44

明らかに [ll] が最も多く、次に [mm], [nn], [rr], [ss], [ff] の持続子音が続き、瞬間子音 [dd], [kk], [pp], [tt], [bb], [gg] は少ないことがわかる。

これまでの多くの重子音についての記述は全てを一括してなされてきたが、それは不適切である。例えば、イタリア語のように、重子音が音韻的価値を持つ言語でも、重子音が全ての単子音に対応しているわけではない。

[ll] に関しては、Dauzat の《Qui est-ce qui ll'a ?》*Le Français Moderne*, (1939) ですでに問題になった、代名詞の l' の重子音化がある。je l'ai vu を [zəl-levy] と発音する、パリ人に多く見られるこの現象は、Carton (1974) によれば、[l] の instabilité に起因する。[l] の不安定性と、重子音の頻度の高さの間に、確かな因果関係があるのかどうかは、別の研究が必要だろうが、それぞれの

音に独自の事情が存在することは確かであろう。

そこで、本論では以後、調査対象を主として [i] にしぼることにする。資料が最も豊富であること、もし重子音が音韻的価値を持つとすれば、[i] が最初であろうことのためである。

2.3.2 [i] に音韻的価値はあるか。

まず、DMW の、アンケートによる全ての単語（収録語数は5万語であるが、実際のアンケートによるのは一万語）について、詳しく見ることにする⁽⁶⁾。[i] については、アンケートの対象になった語が523語で、アンケートによらない語のうち、約220語が表記上、母音間の <i> を有している⁽⁷⁾。表Ⅱでは、インフォーマントの人数別に、[i] が生起する語の数をまとめた。また、接頭辞 *il-* とそれに

表 Ⅱ

[i] の生起数	単語数	%	例	[i-] を含む単語数
17	0	0.0		0
16	4	0.7	<i>syllabaire</i>	2
15	6	1.1	<i>libeller</i>	1
14	15	2.9	<i>hellénique</i>	4
13	17	3.2	<i>ocellé</i>	2
12	22	4.2	<i>alléchante</i>	1
11	18	3.4	<i>allégorie</i>	0
10	18	3.4	<i>stellaire</i>	1
9	34	6.5	<i>alléger</i>	0
8	28	5.3	<i>colloquer</i>	0
7	36	6.9	<i>solliciter</i>	0
6	39	7.4	<i>corollaire</i>	0
5	32	6.1	<i>gallicisme</i>	0
4	42	8.0	<i>allaiter</i>	0
3	34	6.5	<i>collecter</i>	0
2	42	8.0	<i>malléable</i>	0
1	61	11.6	<i>excellent</i>	0
0	75	14.3	<i>aller</i>	0
	523語	100%		11語

続く *l* で始まる語については、特殊な分布を示すので、さらに別にして表に付け加えた。

次に表Ⅲはインフォーマント別の [il] の生起と、アンケートによる523語中の生起率である。表Ⅲにも、*ill-* で始まる11語だけの結果を付記した。

表 Ⅲ

インフォーマント	[il]	生起率	[il-]	生起率
<i>l</i>	341	65.0%	11	100%
<i>j</i>	308	58.7	11	100
<i>b</i>	290	55.2	11	100
<i>v</i>	266	50.7	11	100
<i>r</i>	192	36.6	9	81.8
<i>y</i>	181	34.5	11	100
<i>w</i>	160	30.5	11	100
<i>c</i>	150	28.6	11	100
<i>a</i>	144	27.4	9	81.8
<i>p</i>	142	27.0	10	90.9
<i>x</i>	139	26.5	11	100
<i>t</i>	136	25.9	10	90.9
<i>k</i>	133	21.5	4	36.7
<i>d</i>	106	20.2	7	63.6
<i>g</i>	96	18.3	10	90.9
<i>n</i>	49	9.3	5	45.5
<i>m</i>	5	1.0	0	0.0
計	2818	\bar{m} 31.7%	152	\bar{m} 81.3%

インフォーマントは、*l, j, b, v/r, y, w, c, a, p, x, t, k, d, g/n/m* の4グループに分けられるが、明らかに方言の影響と思われるのは、*m*氏のみである。彼は Savoie 出身で、11歳までこの地を離れることなく育った。この地方は、Martinet (1941), Deyhime (1967) によって、特に重子音が少ないことがわかっている。したがって、表Ⅱには17人全員が重子音化している例は一例もないが、もし *m* を除外するならば、*illégal, illégitime, syllabaire, syllabique* が100%の重

子音化を示す。この結果は、母音の長さの対立に関して [ɛ:] を同じく DMW で調査した宮下 (1980) と比較してみても、明らかに高い数字を示している ([ɛ:] を11人以上が発音している語はない)。

それでは、重子音 [ɪ] は音韻的価値を持っているのだろうか。DMW での高い生起にも関わらず、否定的な結論を出さざるを得ないのは、次の理由による。

DMW の調査は、序論で述べた通り、正確なデータを得るために工夫されているとはいえ、書かれたテキストを読むという方法によっているために、ごく普通の会話での発音と同一とみなすことはできない。Marcellesi, Gardin (1974) は Labov によるニューヨークで発音に関するアンケートの結果を載せているが、文体的変異として、A. langue courante, B. langue soutenue, C. lecture, D. liste des mots, E. lecture de paires minimales の5つのレベルを設けている。そして、AからEへ進むにつれて、規範的、対立的になるのであり、Cの lecture と Bの langue soutenue とは、結果が比較的似通っているとしている (pp. 116-31)。従って、DMW は、話し言葉としては、かなり注意深い、丁寧な発話での発音を示していると考えねばならない。そして、重子音を、まさにこの langue soutenue でのみ発音される音であると言っているのは、Lerond の発音辞典 (1980) である。Lerond は langue soutenue を langue neutre と区別し、例えば *syllabe* の項目では、silAb; sout. sillAb と発音を定めている。彼の説が正しければ、DMW で重子音が多発しているのは、その調査方法のためであるということになる。

重子音については、正音学の手引書などでは、必ず何らかの意見が提示されているし、発音辞典や普通の辞典の発音の表示も、情報をもたらす。そこで次に、19世紀末以後の記述を引用して、重子音が確かに style との相関関係を示しているのかどうかを検討する。

Fouché (1961 : pp. 877-80) は重子音について、19世紀末に最高に達し、それは *Dictionnaire Générale* (1889-91) の記述の通りであると述べているが、果たしてそうであろうか。彼がすぐ後に述べているように、Passy の *Dictionnaire phonétique de la langue française* (1897) がほとんど重子音を認めていないのと

は、格段の相違がある。Fouché は *Dict. Gen.* を認めて、Passy を《Elle représente quelque chose de familier et parfois même de vulgaire que la langue générale des personnes cultivées n'a pas toujours acceptée.》(p. 878) とし、一方、Martinon (1913) は *Dict. Gen.* を批判して、《...de plus, il paraît dans beaucoup de cas surbordonner ses solutions à l'orthographe ou à l'étymologie, sans tenir assez de compte de l'usage véritable, indiquant ce qui doit être ou ce qui devrait être plutôt que ce qui est.》(p. III) と述べている。したがって、重子音は19世紀末にもやはり、ことばの style の問題と深く関わっていたと考えてよいだろう。

次に、正音学者の態度を年代順に示す。

- Martinon (1913) : 「極めて学者語的な語においてのみ、重子音を発音することができる。例えば、重子音で発音すべき語を単子音で発音したところで、重大な誤りではないが、反対の場合は非常に奇異である。」(pp. 207-08)
- Grammond (1914) : 「重子音は *génie de la langue française* に反しており、極めて学者語的であって、稀な、又は特殊な語においてしか、発音することはできない。」(p. 90)
- Fouché (1956) : 「記述はないが、思い切りよく二分して、Grammond で、どちらともつかぬと判断されている語は全て、重子音化のグループに入れている。
- Warnant (1968) : Fouché とほぼ同様で、明確に二分している。
- Grand Larousse de la langue française*, tom. II (1972) : 「全ての語で、単子音が正しい。語中で重子音を発音するのは不適切である。」(p. 930)
- Lerond ((1980) : 「重子音は *style soutenu* で用いられ、中立的なフランス語では、すべて単子音である。」(p. XVIII) しかも、*style soutnu* でも、重子音を認めているのは、Fouché とほぼ同じ語項目のみである。

このように見てくると、重子音は、言語のある特定のレベルで多用されるけれ

ども、必ずしも発音しなければならないというわけではなく、[ɪ] は [i] と同じ音韻的価値しか持たないと要約せざるを得ない。Fouché と Warnant は、明確に、重子音のみを、多くの語の発音として掲げているが、彼らが基礎を置いているのは、およそ Lerond のいう *style soutenu* に相当する、「改まった席での気をつけた話し方、文学的でない普通の文章の読み方」での教養あるパリ人の発音である。だから、上記の要約と、Fouché, Warnant の態度は矛盾するところはないわけである。

また、*langue soutenue* においてさえも、[ɪ] が全ての ⟨ɪ⟩ に対応しているわけではないことは、全ての学者の一致した考えであり、表Ⅱに、ほぼ100%の重子音化と、0%の重子音化が存在することによって、それは明らかである。しかし、実際は、100%と0%が分離して存在している傾向は全くなく、その間は連続的である。したがって、現代では、語彙のレベルでも不安定な状態を呈していることがわかるのである。

2.3 重子音と正書法

以上のように、19世紀末以来のフランス語では、重子音は、言語のレベル、話者の社会的階層、語の性格などの要因によって、不安定に揺れ続け、しかも、DMW の調査で明らかにされたように、頻繁に発音されて来た。そして共時的には、「正書法の影響によって、学者語で発音される。」とするのが、大方の学者による、この現象の最大公約数的説明である。しかし、正書法が発音に関与するのは、正書法によって書かれた綴り字が、その言語に特有の慣用的な読み方で読まれる場合であって、単に、子音字が2個表記されているからと言って、重子音化されるわけではもちろんない。つまり、正書法が影響を与えるためには、すでに [ɪ] と ⟨ɪ⟩ の連合ができ上がっていることを前提にしなければならない。そこで、重子音がラテン語からの借用によって導入された事情と、その後の経過を追ってみよう。

2.3.1 重子音の歴史

フランス語の重子音を考える時、明確に区別しなければならないのは、書法上の重子音字と、発音上の重子音である。

書法上は Waltburg (1934) の言うように、すでにかなり古くから、語源的な子音字で文字を飾る習慣があり、*mot savant* だけでなく、*mot populaire* にも重子音字があった。しかし、重子音がフランス人の間で発音されるようになるのは、16世紀以後のことである。というのは、ラテン語教育の場で重子音が発音されるようになったのは、16世紀になってからのことだからである⁽⁶⁾。ラテン語は死語であって、実際に母国語として話す人は誰もいないのだから、教育の場での発音が唯一無二の発音であった。そして、その当時、ラテン語から新しい単語を借用する時、ラテン語音の重子音を保ったままで、フランス語として使われるようになった。例えば、*allusion* は、16世紀末の借用語であるから、〈ll〉と表記し、[ll]と発音することになったのである⁽⁷⁾。

それでは、16世紀以前からあったと思われる、単なる書記上の〈ll〉に対する発音 [l] の連合は、重子音 [ll] の導入に影響を及ぼさなかったのだろうか。理論的には、もしもすでに〈ll〉と [l] の連合が確固たるものであったならば、外国語音の [ll] が〈ll〉と共に導入された時、[ll] を [l] に変えてしまうはずである。そうならなかつたと言うことは、この連合が不安定なものであったことを容易に証明している。

まず第一に、正書法が確立していなかったことが挙げられる。一般に、フランス語の書記体系への信頼度は、現代に比べて極めて低く、表記が発音に影響を与えることはなかったと考えてよい。この当時は、知識人達の間では、フランス語の書記による [l]=〈ll〉よりも、むしろ語源のラテン語の書記による [ll]=〈ll〉の方が強力な影響力を持っていたはずである。16世紀以前のラテン語からの借用語、例えば *collecte* (13世紀) や *syllabe* (12世紀) が Lanoue (1594) ですでに重子音化されているのはこのためである⁽⁸⁾。そして、知識階級では、重子音は *mot populaire* にまで及んでいたようである。Lanoue は次のように述べている⁽⁹⁾。

«Le plus notable» abus de l'orthographe «pour estre le plus ordinaire ... qu'on double en la plus part des mots les consonantes qui y doiuent estre simples.»

フランス語の正書法が確立するのは、少くとも重子音に関する限り、ずい分後のことで、確たる安定を得るには、19世紀を待たねばならない⁶⁹。

第二に、知識階級と一般大衆の言語の相違が、重子音の問題を一層複雑にしている。

ラテン語からの借用語、すなわち *mot savant* を使用するのには、ラテン語の知識を持つ一部の知識人に限られ、重子音はラテン語音であるから、これを発音するのも彼らである。彼らは、16世紀以前の借用語も、語源的にラテン化して表記し、発音し、さらにこの傾向は *mot populaire* にも及んだ。しかし、*mot populaire* は知識階級だけのものではなく、ラテン語も文字も知らない一般大衆こそが、これらの語の真の使用ユーザーなのであるから、*mot savant* とは異なり、*mot populaire* では、例えば、〈aller〉と重子音字で表記され、一部の人々が [ɪ] と発音したとしても、大多数を占める大衆の発音が、これに打ち克つことになった。

以上をまとめると、次のようになる。

	mot pop.	mot sav.	
		16世紀以前	16世紀以降
知識階級	〈1〉 … [1] 〈ɪ〉 … [ɪ]	〈ɪ〉 … [ɪ]	〈ɪɪ〉 = [ɪ]
一般大衆	[1]	×	×

厳密な意味での外国語音 [ɪɪ] は、16世紀以後の *mot savant* のみに聞かれ、この場合、書記と発音の連合は密であったと考えられる。そして、それ以前の *mot savant* も、語源、ラテン語の影響で 〈ɪɪ〉 = [ɪ] が確立して来る。最後に、ラテン語の影響は *mot populaire* にも及ぶが、これは知識人の間でも様々なバリエーションがあり、また一般大衆は決して重子音化しない。このような揺れを保ったまま、19世紀を迎え、正書法が確立するのであるが、その時基準となるのは、知識

階級の語源的書記法で、様相は次のように変わった。

mot pop.	mot sav.
<ll> = [l]	<ll> = [ll]

2.3.2 現代の重子音と正書法

しかし、2-2で見た通り、重子音の問題がこれで全て、説明できるわけではない。もしも、<ll>の綴り字が、[ll]にだけ対応していたなら、つまり外来語だけに<ll>があり、それは必ず[ll]と発音すると決まっていたなら、外国語音・重子音は安定し、フランス語で重子音は音韻的価値を持つに至っていたはずである。これを妨げているのは、言うまでなく、もう一つの連合、<ll>=[l]である。逆に言えば、<ll>=[l]を知識階級が作り上げてしまったために、新しい音韻的価値の創造が不可能になってしまったのである。

現代では、<ll>は[l]と[ll]に対応している。そして、その差異は、語源的に、mot savantか、あるいはmot populaireかに依るのが、歴史的帰結のはずである。しかし、langue couranteでは、この区分はほとんど消滅しているようであるし、langue soutenueでも、語彙的混乱が生じている。そこで、再びDMWを用いて、現代の重子音が、語彙的にいかなる分布を示しているかを検討する。

現代は16世紀とは違い、mot savantは知識階級だけのものではなく、一般の人々も頻繁に使う。従って、かつての外来語がフランス語化されるにつれて、その外来語性を失い、重子音が単音化される、つまり<ll>=[l]による類推が働く。そこで、最初に、基礎語彙での分布を調べる。次の表は、*Dictionnaire fondamental de la langue française*から、母音字間に<ll>がある全ての語を抜き出し、DMWと*Dict. Gen.*の記述を付記したものである(数字はDMWで重音化しているインフォーマントの人数。+は*Dict. Gen.*で重子音、-は単子音)。

*Dict. Gen.*で[ll]になっているのは、mot savantばかりであるから、<ll>=[ll]がかつては連合していたはずである。しかし現代では、villaとill-で始まる語を除いて、ほとんどの人が単子音で発音している⁶⁴。*Dict. Gen.*で[l]の

表 IV

<i>allée</i>	—	<i>allure</i>	—	<i>colline</i>	—	<i>installer</i>	—	<i>millième</i>	1	—
<i>aller</i>	0	<i>ballon</i>	—	<i>excellent</i>	1	<i>intellectuel</i>	3	<i>millier</i>	1	—
<i>alliage</i>	—	<i>collectif</i>	3	<i>falloir</i>	0	<i>intelligence</i>	2	<i>million</i>	0	—
<i>alliance</i>	—	<i>collection</i>	0	<i>illustre</i>	11	<i>intelligent</i>	2	<i>millimètre</i>	2	+
<i>allier</i>	—	<i>collège</i>	0	<i>illustration</i>	4	<i>métallurgie</i>	1	<i>pull-over</i>	0	—
<i>allumer</i>	—	<i>coller</i>	—	<i>illustrer</i>	6	<i>métallurgiste</i>	1	<i>villa</i>	15	+
<i>allumette</i>	—	<i>collier</i>	—	<i>installation</i>	—	<i>milliard</i>	0	<i>village</i>	—	—

語では、*excellent*, *millième*, *millier* でそれぞれ一人が [11] を発音しているが、これはほとんど無視できる数字であると思われる。

次に、過去において [1] であったはずの語で、現代、多くの人々によって [11] と発音されている語の性質を調べよう。

Dict. Gen. では [1] であったのに、DMW で [11] が報告されている語の例を挙げる。

<i>chambellan</i>	(10人)	<franc.	11世紀
<i>hollande</i>	(9人)	<germ. (地名)	15世紀
<i>alluchon</i>	(7人)	<lat. pop.	15世紀
<i>parallèle</i>	(6人)	<lat.	15世紀
<i>allécher</i>	(10人)	<lat. pop.	12世紀
<i>desseller</i>	(3人)	<lat.	12世紀
<i>circonvallation</i>	(3人)	<lat.	17世紀
<i>allaiter</i>	(3人)	<bas. lat.	12世紀

上記の内、*alluchon*, *allécher*, *desseller*, *allaiter* は、*mot populaire* であり、*chambellan* は極めて古い、ほとんど土着語と呼びうる、フランク語からの借用語である。このような語で重子音が発音されている理由は、その使用が稀になって来て、使用頻度の高い語=*mot populaire* という図式からはみ出してしまったから

と考えられる。*chambellan*, *alluchon*, *desseller* は, *Petit Robert* 50,000語には収録されているが, *DFC* の25,000語にはない。

また, *desseller* に関して言えば, この語は *seller* の派生語の一つなのであるが, 同じグループに属する語の間で重子音の生起は異なる。

seller ... 0, *sellier* ... 1, *sellette* ... 1,
ensellé ... 3, *desseller* ... 3, *ensellure* ... 5,

ensellure は語源的には, *populaire* であるが, 現在は医学用語として用いられているので, 重子音化しても不思議はなく, <ll>=[l] の連合が, <ll>=[ll] にかわる一つのモデルと考えられるだろう。

最後に, 19世紀以降のラテン語からの借用語での重子音の生起を調べてみる。

表 V

[ll] の生起数	① 総単語数	② [il-l] を含む単語数	③ 19世紀以降の借用語数	③の例	③/①(%)
17	0	0	0		0.0
16	4	2	0		0.0
15	6	1	1	<i>illuvion</i>	16.7
14	15	4	1	<i>tabellaire</i>	6.7
13	17	2	4	<i>micellaire</i>	23.5
12	22	1	3	<i>illuviation</i>	13.6
11	18	0	0		0.0
10	18	1	4	<i>belligérance</i>	22.2
9	34	0	9	<i>allèle</i>	26.5
8	28	0	3	<i>bacillaire</i>	10.7
7	36	0	6	<i>isallobare</i>	16.7
6	39	0	10	<i>colluvion</i>	25.6
5	32	0	5	<i>pullorose</i>	15.6
4	42	0	9	<i>tellureux</i>	21.4
3	34	0	3	<i>collimateur</i>	8.8
2	42	0	4	<i>pellagreux</i>	9.5
1	61	0	1	<i>gallérie</i>	1.6
0	75	0	2	<i>collargol</i>	2.7
計	523語	11語	65語		12.4%

〈II〉=[11] と 〈II〉=[1] の二種類の連合がすでにある時、新しい借用語がどちらを選ぶかを明らかにするためである。表Vでは、[11]の生起別に、全ての単語数に占める、19世紀以後のラテン語からの借用語の割合を示した。

最近の借用語では、全体に比べてかなり高い重子音化があることが明らかである。これは、現代でも、[11]には外来語性、学者語性と結びつく傾向が確かにあることを示しており、〈II〉=[11]が、〈II〉=[1]に同化される様子は見られない。この不経済な正書法と発音の関係は、その不経済性故に不安定ではありながら、現在のところ、少なくとも *langue soutenue* では、整理されることなく存続すると考えられる。

3. [ŋ] について

フランス語で [ŋ] が聞かれるようになったのは、明らかに英語からの借用語の影響であるが、フランス語への英語の借用は、17世紀初頭まではほとんどなく、19世紀以降、飛躍的に増加した⁶⁴。[ŋ] が導入されたのも、19世紀以降で、前章で明らかにされたように、この時期には、正書法は確立していたため、正書法の働きによる外来語音のフランス語化が、行なわれていたと考えてよいだろう。それでは、なぜ、[ŋ] は、フランス語の子音体系の中に組み入れられて、音素として認められ、*shopping / chopine, footing / fatigue* の対立を示すに至っているのだろうか。

3.1 [ŋ] の音韻論的考察

[ŋ] は、フランス語の子音体系の中で、非常に経済的な位置を占めることができる。というのは、[ŋ] は軟口蓋鼻音で、軟口蓋性、鼻音性は共に、フランス音がすでに持っている弁別特性であるためである。フランス語は、/ŋ/ を獲得することにより、次のような均勢のとれた体系を作り上げた。

P	t	k
b	d	g
m	n	ŋ

換言すれば、/ŋ/ の獲得は、Martinet の《cases vides》を埋める、他の音素による牽引の理論に合致するのである。しかし、もちろん、この理論による説明が有効であるにしても、音韻体系の変化は、簡単に起こるものではなく、他の要因が、この音素の導入に役割を果たしていることは間違いがない。

3.2 現代フランス語の [ŋ]

次に、DMW を使って、現代フランス語の [ŋ] を検討する。資料は、語末に [ŋ] が現れる語のみを用いた。語中であれば、それが、前後の音による同化の結果かも知れず、例えば、*diagnostic* では、1人のインフォーマントが [dʒaɲɔstik] と発音している例からもうかがわれる。表 VI に、[ŋ] が1人以上のインフォーマントによって発音されている語を挙げる。

表 VI

	[i] +						[ɛ̃] +			angl.	その他
	[ɔ]	[ɔs]	[ɔk]	[ɔ]	[ɔɔ]	[ɔg]	[ɔ]	[g]	[ø] ⁽⁶⁾		
<i>meeting</i>	15			1	1						
<i>parking</i>	15			1		1					
<i>schilling</i>	14	1		1					1		
<i>Riesling</i>	14					2			1(allem.)		
<i>karting</i>	14	1		1					1		
<i>lasting</i>	14			1							2(?)
<i>blooming</i>	14			2							1(?)
<i>plum-pudding</i>	13	1				1			2		
<i>swing</i>	13	3									1[ɔŋ]
<i>planning</i>	13				1	1			3		
<i>rowing</i>	12		1	1		1			2		
<i>briefing</i>	12			1	1	1			2		
<i>standing</i>	12			3					1		1[iɔŋ]
<i>sterling</i>	12			1		2			1		1[ɛ̃]
<i>cracking</i>	12			2					1		2[iɔŋ]

<i>yachting</i>	12			1	1		2	1[iəŋ]
<i>travelling</i>	12			2		1	2	
<i>smoking</i>	11	3				1	2	
<i>sleeping</i>	11			1		2	2	1[iəŋ]
<i>sanderling</i>	11		1	2		2		1(?)
<i>pressing</i>	11	3		3				
<i>dispatching</i>	11	2	1		1	2		
<i>clearing</i>	11			1	2		3	
<i>bowling</i>	11			1	2	1	2	
<i>yearling</i>	11	1			1		4	
<i>looping</i>	10	1		3		1	2	
<i>shopping</i>	10	4		2			1	
<i>shocking</i>	10	3		1			2	1[iəŋ]
<i>ring</i>	10	3	1	1		2		
<i>fading</i>	10			3		2	2	
<i>forcing</i>	10			4		1	2	
<i>holding</i>	10	1		3			3	
<i>dancing</i>	10			4		2	1	
<i>curling</i>	10			2		1	4	
<i>pudding</i>	9	2		1		2	3	
<i>dumping</i>	9	1	1	4	1		1	
<i>jumping</i>	9			4			4	
<i>camping</i>	9			3	2	2	1	
<i>shirting</i>	8	2			3		4	
<i>doping</i>	8			5	1	1	2	
<i>lemming</i>	7	5		1			2	2(?)
<i>footing</i>	7	1		4			5	
<i>dry farming</i>	7	3	1				3	3[iŋŋ]
<i>dring</i>	7	1	1	3	1	3		1[ing]
<i>shaking</i>	6	4		2	1		4	
<i>browning</i>	5	5		1		2	4	
計	492	51	7	77	22	34	82	18
一語平均	10.7	1.1	0.2	1.7	0.5	0.7	1.8	0.4

	[a] + [ŋ] [ŋg] [ŋk] [ɲ] [ɲɲ] [ɲg]	[ã] + [ŋ] [g] [ø]	angl.	その他
<i>linsang</i>		5 4 1		7(?)
<i>slang</i>		4 7	6	
<i>boomerang</i>		3 12 1		1(?)
<i>watergang</i>		2 11		4(?)
<i>mustang</i>		1 11 4		1(?)
計		15 45 6	6	13
一語平均		3 9 1.2	1.2	2.6
	[o] + [ŋ] [ŋg] [ŋk] [ɲ] [ɲɲ] [ɲg]	[õ] + [ŋ] [g] [ø]	angl.	その他
<i>sou-chong gong</i>	1	5 9 2 1 12 3		1[õŋg]
計	1	6 21 5		1
一語平均	0.5	3 10.5 2.5		0.5
	[u] + [ŋ] [ŋg] [ŋk] [ɲ] [ɲɲ] [ɲg]	[œ], [õ] + [ŋ] [g] [ø]		
<i>bacfung</i>	6 5 1	3		2[œg](?)
<i>weltanschauung</i>	3 2		6(allem.)	6(?)
計	9 7 1	3	6	8
一語平均	4.5 3.5 0.5	1.5	3	4
	[i] + [ŋ] [ŋg] [ŋk] [ɲ] [ɲɲ] [ɲg]	[ĩ] + [ŋ] [g] [ø]		
<i>bastaing</i> (<i>basting</i>)	4	7 4		2(?)

以上の結果をもって、[ŋ] を音素として認めるか否かは、学者の判断によるだろう。しかし、多くのインフォーマントが、[ŋ] を語末で単独で発音しており、少なくとも音素と判断する傾向が有力となっていることは明らかであろう。現代の発音に関する手引書と発音辞典では、Fouché, Warnant, Lerond, Léon は [iŋ]

のみを〈ing〉の発音と認めている。しかし、/ŋ/ の出現する位置は非常に限られていて、語末の〈ing〉/iŋ/ のみであり、甘い基準をもってすれば、〈ung〉/uŋ/ を付け加えることができる。残りの〈ang〉, 〈ong〉については、[aŋ], [oŋ] という連続は全くなく、[ãg], [õg] が大部分である。つまり、同じように英語やドイツ語では生起する語末の /ŋ/ が、フランス語では、はっきりと、〈ing〉と〈ung〉, 〈ang〉と〈ong〉のグループに二分されている。表には現れていないが、英語の *shampooing* は、DMW では、インフォーマント全員が [ʃãpwẽ] と発音している。これは徹底した綴り字読みであり、〈ang〉と〈ong〉に、この〈oing〉もつけ加えなければならない。そこで、この2つのグループ分けには、正書法の問題が関連していると考えざるを得ない。

3.3 [ŋ] と正書法

shampooing を [ʃãpwĩŋ] でなく、[ʃãpwẽ] と読むのは、*poing*, *coing* などのフランス語の語彙での〈oing〉=[wẽ] の連合が影響しているからである。この他に、語尾が〈ng〉で終わる語の連合には、次のようなものがある。

〈-ang〉, 〈-eng〉=[ã] : *étang*, *rang*, *sang*, *hareng*

〈-aing〉, 〈-eing〉=[ẽ] : *parpaing*, *blanc-seing*

〈-ong〉 = [õ] : *long*, *oblong*

〈-ung〉は、フランス語の語彙では、固有名詞にだけ見られる特殊な綴り字である(例：*Le Mung* 等)。そして、〈-ing〉で終わる語は本来のフランス語には、全く見られない。したがって、正書法と発音の連合という観点からみて、〈-ang〉, 〈-eng〉, 〈-aing〉, 〈-eing〉, 〈-ong〉は、〈-ung〉, 〈-ing〉と対立するものである。

外来語音が借用される時に、言語本来の正書法と発音の連合に影響されるのは、序章で述べた通り、フランス語で頻繁に見られる、音のフランス語化の方法である。*shampooing* は [wẽ] という発音に変化し、それが安定した。また、〈ang〉と〈ong〉で終わる単語も、〈ing〉, 〈ung〉とは異なり、鼻母音を保持し、綴り字読みで [ã], [õ] の発音をしている人も少ない。そして、最も多い、語末の子音を

残して, [ãg], [õg] と, 少しは元の外来語音に近いものを維持する場合でも, その音配列は, フランス語本来の音配列を少しも混乱させてはいない。これに対して, <ing> と <ung> の場合は, 音素 /ŋ/ の獲得に寄与しているのは, 上に述べた通りである。つまり, フランス語には, 外来語の <ing>, <ung> を同化し得る連合がないために, 外来語音をそのまま受け入れざるを得ない状況にある, と考えられるのである。

4. 結 論

最後に, 重子音と [ŋ] の比較を行う。詳細は本論参照のこととし, 図式化すれば, 外来語音である, 重子音と [ŋ] の導入から今日に至る経緯は, 次の通りである。

	16世紀		19世紀
重子音…	{	<ll>=[ll]…外来語	{
		なし=[l]…土着語	<ll> = [ll] …外来語
			<ll> = [l] …土着語
[ŋ]			{
			<ing>=[iŋ]…外来語
			なし …土着語

フランス語では, 現代では, 正書法が機能して, 外来語音の導入を妨げるわけであるが, 重子音は, まだ正書法が確立していなかったために, また [ŋ] は, 類推のもとになる土着語での連合が存在しないために, どちらの音もフランス語に入った。その背景には, ラテン語と英語の強力な影響力があることも見のがせない。ところが, 重子音の方は, その後の正書法の確立により, <ll>=[l] の連合が土着語において作り上げられたために, そして外来語と土着語の区分そのものが, 時がたつにつれて変化したために, 非常に不安定なものになったと考えられる。これに対し, [ŋ] は, <ing>=[iŋ] の連合が確立しているために安定し, 音素として認められ得る状況にある。

以上のことから, フランス語では, 正書法が, 単に語形を変える働きのみならず, 言語体系そのものの変化に関与していることが明らかになった。

Burney (1962)は、このような正書法の影響力は、他の言語に比べてフランス語で最も強力であると述べている。つまり、フランス語の正書法と発音との構造的関係が、このような力を持つに最適な状態にあり、その威力をふるっていると考えねばならないだろう。

註(1) 以後 < > は書記を示す。

- (2) *poignet* の場合は、*poing* [pwã] により、書記法と意味の両方からの類推が働いている。
- (3) DMW を用いて行う、本論の調査の一部は、H. Walter 自身が *la Dynamique des phonèmes dans le lexique français contemporain* (1976) ですでにまとめているが、誤りが多いために、参照できなかった。
- (4) このほかに、実際には、表現的重子音 (gémignée expressive) と言われるものが存在する。これは、語の第一子音を重音化することによって、感動を表現するものである (例: *épouvantable!* [ep-puvãtbl]). この重子音は、正書法上の重子音字とは無関係に現れ、明らかに単子音の文体的変異である。
- (5) George E. Vander Beke (厚母清一訳): 『仏蘭西基本単語』(1931) (*French Word Book* (1927) の邦訳)
- (6) アンケート調査がなされた語は、各種の発音に関する著作11冊の記述に、少しでも不一致が認められた語である。したがって、アンケートされた語=重子音に関して問題ありとされた語ではない。ことに生起ゼロの語の内の何割かは、他の問題を調査するために選ばれたと考えられる。
- (7) 書記 <ill> については、<ill> に対する発音 [j] の問題に触れておかねばならない。*travailler* では、<ill> は必ず [j] と発音されるが、<ill> 対して、[j] と [il] と [iil] が、あるいは [j] と [il] が競合している語も少ない。表Ⅱでは生起1以上の語については、[j] の問題は考慮しなかった。生起ゼロでは、[j] を含む語は除外した。結果として、523語のうち、30語が [j] の発音を含んでいる。
- (8) Cf. Fouché (1961): *Phonétique historique du français* p. 877. Thurot (1966): *de la Prononciation française* tom II, pp. 370-90.
- (9) 語源は、Dauzat (1971): *Nouveau Dictionnaire Etymologique et Historique* の記述による。
- (10) Thurot, op. cit. pp. 384-85.
- (11) ibid. p. 371.
- (12) Thurot, ibid. には、16世紀以来の諸学者の重子音字に関する記述がある。これによると、Lanoue 以来、19世紀まで、重子音は様々に表記され、現在の綴り字とほぼ等しい

と認められるのは, Domergue (1805) が最初である。Richelet (1680) では, 重子音字は, 明らかに借用語と考えられる *allusion, pallium, colloquer* 等で表記されているにすぎない。特に, *allécher, alléger, allègre* 等の *mot populaire* では, 諸家が様々に綴っていることがわかる (pp. 370-390)。

- (13) *villa* は, イタリア語起源である。イタリア語からの借用による重子音は, 18世紀以降増加して, フランス語の *allègre* <*alacer* が, このように綴られ, 重音化されるようになったのは, イタリア語の *allegro* の影響と言われている。このように, 重子音化には, ラテン語以外の外国語の影響も働いているが, ラテン語が根幹となっていることには変わらない。
- (14) Cf. Guiraud (1971) : *Les mots étrangers* p. 83.
- (15) [ø] は, ゼロの意。つまり, 鼻母音で終わる発音である。

参 考 文 献

- BURNEY, Pierre- *L'Orthographe*, PUF, Paris, 1962.
- CARTON, Fernand- *Introduction à la phonétique du français*, Bordas, Paris, 1974.
- DAUZAT, (A.), DUBOIS, (J.), MITTERAND, (H.)- *Nouveau dictionnaire étymologique et historique*, 3^e éd. rev. et corr., Larousse, Paris, 1971.
- DEYHIME, Guiti- Enquête sur la phonologie du français contemporain, *La Linguistique*, 1967, I, pp. 97-108, II, pp. 57-84.
- FOUCHE, Pierre- *Traité de prononciation française*, Klincksieck, Paris, 1956.
- *Phonétique historique du français*, tom. III, Klincksieck, Paris, 1961.
- GOUGENHEIM, Georges- *Dictionnaire fondamental de la langue française*, Modern Asia Edition, 1963, [1^{re} éd. : 1958, Didier, Paris.]
- GUIRAUD, Pierre- *Les mots savants*, PUF, Paris, 1968.
- *Les mots étrangers*, PUF, Paris, 1971.
- GRAMMOND, Maurice- *La prononciation française, Traité pratique*, 9^e éd. Delagrave, Paris, 1966, [1^{re} éd. : 1914]
- GUILBERT, (L.) etc.- *Grand Larousse de la Langue Française*, 2, Larousse, Paris, 1972.
- HATZFELD, (A.), DARMESTETER, (A.)- *Dictionnaire générale de la langue française du commencement du XVII^e siècle jusqu'à nos jours...*, 9^e éd. Delagrave, Paris, 1932, [1^{re} éd. : 1889-1901]
- LEON, Pierre-R.- *Prononciation du français standard*, Didier, Paris, 3^e éd., 1976,

- [1^{re} éd. : 1966]
- LEROND, Alain- *Dictionnaire de la prononciation*, Larousse, Paris, 1980,
- MARCELLESI, (J.-B.), GARDIN, (B.)- *Introduction à la sociolinguistique*, Larousse, Paris, 1974.
- MARTINET, André- *La prononciation du français contemporain, Témoignages recueillis en 1941 dans un champs d'officiers prisonniers*, Droz, Genève, 2^e éd. 1971, [1^{re} éd. : 1945]
- MARTINET, André, WALTER, Henriette- *Dictionnaire de la prononciation française dans son usage réel*, France Expansion, Paris, 1973.
- MARTINON, (Ph.)- *Comment on prononce le français*, Larousse, Paris, 1913.
- THUROT, Charles- *De la prononciation française, depuis le commencement du XVI^e siècle*, Slatkine Riprints, Genève, 1966, [1^{re} éd. : Impr. Nat., Paris, 1881-83]
- TROUBETZKOY, (N.S.)- *Principe de phonologie*, trad. par J. Cantineau. Klincksieck, Paris, 1970, [1^{re} éd. : 1949]
- WALTER, Henriette- *La Dynamique des phonèmes dans le lexique efrançais contemporain* France Expansion, Paris 1976.
- WARTBURG, Walther von- *Evolution et structure de la langue française*, 10^e éd., Francke, Berne, 1971, [1^{re} éd. 1934]
- ヴァンダ・ベーケ (厚母清一訳)- 『仏蘭西語基本単語』1931年, 東京。
- 宮下明信- *Sur la voyelle française [ɛ:] - analyse phonologique*, 京都産業大学論集, 第9巻, 第3号, 1980年, pp. 35-59.